

新潟大学理学部同窓会

会報

第25号 2024.09.01



会報に寄せて

理学部同窓会会長 物理支部長
麿 沢 祐 一

理学部創立75周年おめでとうございます。この75年という年月は、大変長く大きな意味を持ちます。この75年という長い時間をかみしめてみてもいいのではないのでしょうか。

私は、昭和49年（1974年）入学ですが、当時新潟大学のバスの終点「西門」でバスを降り、毎日大学の授業に通いました。しかし、道の延長線、つまり先には道がありませんでした。道すらなかったといった方がいいかもしれません。（現在では、一帯が大きな住宅地です。しかし、当時は道がなかったのです。今では考えられません。）バスが通る道も、商店街の様相ですが、当時それはなくさびしい街並み、いや道路だけしかありませんでした。現在の新潟大学の周辺から想像できないことでしょう。50年たって、町としてとてもにぎやかになり、人や学生の行き来も多く本当に変わったなあ、いい学生街になったなあと感じます。

これは時間が単に経っているだけでなく、これまでの新潟大学の学生や卒業生が活躍し、成果を出し、社会に認められてきたからです。つまり、新潟大学に多くの優秀な学生が集まり、大学で学んで卒業してから、社会で活躍し成果を出し、大学が評価され、そこでまた優秀な学生が集まるという好循環によって、新潟大学が発展してきたからにはほかなりません。

また、今思いますと、私が所属した物理学科の授業は厳しいものでした。しかし、だからこそ成長したのだと、この年になって実感しています。大学2・3年生になって、解析力学、電磁気学、量子力学などを学びましたが、難解でした。授業を聞いて考えてすぐに理解できるということはありませんでした。私も、しっかり聴き、しっかりノートをとっていましたが、難解で難解でこの分からない内容を試験までにどうすればいいのかというのが友達同士の日常会話であったと思います。そこで、わかりやすい本を探したり、教えてくれる仲間に質問したり、有志のゼミなどにも取り組みました。しかし、当時のこのような努力が、自分を成長させ鍛えたのだとしみじみ思います。このように、新潟大学が学生を鍛え育てたといえると感じます。

この度、75周年ということですが、この時期に理学部のA棟の改修計画があります。もちろん、文部科学省や新潟大学本部からの予算も充填されるようですが、予算化されないものがあるそうです。例えば、現在の研究室内の備品、書籍などの移送費、当然出し入れともにです。部屋の環境整備の備品、例えば、ブラインドなどは認められていないと聞いています。これらには概算で3,000万円程度が必要であるとのことでした。「引越→改修→引越」を行う費用が必要です。

そこで、大変申し訳ございませんが、今回75周年ということで同窓会員の皆様から寄付をお願いしたいと思います。物価高騰の折、誠にお願いしにくいことではありますが、できる限りでももちろん結構です。重ねて、どうかよろしくお願いいたします。



理学部の近況

理学部長 大 鳥 範 和

今春も、卒業式と入学式を朱鷺メッセで、理学部卒業祝賀会をANAクラウンホテルで、それぞれ開催でき、祝賀会は5年ぶりの宴席となりました。理学部では、195名の卒業生を送り出して、208名の新入生と11名の3年次編入生を迎えました。改めてお祝い申し上げます。

「理学部は今」でも触れましたが、理学部の地域社会連携事業の柱である次世代の科学人材育成事業として、新たに4月から中学生と高校生を対象とする育成計画を、それぞれ中谷医工計測技術振興財団と科学技術振興機構からの補助を受けて開始しました。本事業は、2011年度の未来の科学者養成講座支援事業に端を発し、これまで連綿と引き継がれてきましたが、新潟県や新潟市の教育庁や教育委員会、さらには植物園などの新潟県の公共施設や一正蒲鉾などの企業様のご協力なしには成し得なかったもので、ここに改めて感謝の意を表しますと共に、今後のさらなるご協力をお願いするものです。採択時期が早かった中学生対象の事業は既にホームページ[1]も立ち上がり、一方、直近に採択された高校生対象の事業は、8月からテレビCMなどで受講生を募集する予定です。

また、昨年この欄でも紹介しました、文科省による「大学の世界展開力強化事業」は計画どおり順調に、1年目の学生の派遣と受け入れを実施し、この7月からは2年目の受け入れが始まりました。10日間の短期

受け入れでは、インド、スリランカ、オーストラリアからの学生30名程度が、オンラインの事前学習を経て来日し、理学部の学生と共に、昨年は浅間山、今年は糸魚川でのキャンプを伴うフィールド活動などの実習を体験しました。その1年目の様子は、JV-Campusにも動画で紹介[2]されており、同窓会の皆様にもご覧頂くことができます。

一方、A1棟の改修工事は、優先される教育学部棟の改修工事の長期化のため、数年間は見通しが立たないことが判明しました。サイエンス・ミュージアムのリニューアルも遅れることとなりますが、全学のミュージアム構想推進を担当する准教授を理学部で採用する運びとなり、ミュージアムの発展に寄与するものと期待しています。

最後になりましたが、本学は創立75周年を迎えています。10月19日の記念式典に向けて、ホームカミングデーなどを企画しているプログラムもありますので、奮ってご参加下さい。紙面の都合で詳細は省きますが、理学部主催の国際会議[3]を9月に開催する予定で、同窓会からも補助を頂いております。また、上述の諸活動の推進のため、理学部では「次世代サイエンス人材育成拠点整備応援基金」[4]を募っております[5]。引き続き、理学部の活動にご支援のほど何卒宜しくお願い申し上げます。

[1] <https://www.sc.niigata-u.ac.jp/n-step/index.html>

[2] <https://www.jv-campus.org/jvc-content/354937/>

[3] <https://www.sc.niigata-u.ac.jp/ICNS2024/>

[4] <https://www.niigata-u.ac.jp/university/donation/science/>

[5] 寄付申込フォーム（右記二次元コード➡）



理学部 後援会 より

後援会会長 渡 辺 則 之

平素は理学部後援会の活動にご理解とご協力を賜り厚く感謝申し上げます。また、新潟大学同窓会会員の皆様には、ますますご健勝のこととお喜び申し上げます。

私たち後援会は学生の皆さんの学業はもちろん、課外活動や学生生活全般にあたり、保護者の皆様とともに見守り、サポートしてまいりました。また、大学の教育・研究活動に対しても、後援会として積極的に協力し、大学の更なる発展に寄与してまいりました。

近年猛威を振るってきた新型コロナウイルスもようやく落ち着いてきております。

昨年は4年ぶりに例年どおりの卒業式を行うことができました。また、後援会として卒業祝賀会を滞りなく終えることができたことは、うれしく思っ

ております。

今年は国際交流事業への援助をはじめ学生の研修や実験・実習への援助、インターンシップ関係の援助や大学祭の援助など各種事業、卒業祝賀会にも、引き続き協力していきたいと考えております。

今後も「本学部と家庭との連携を緊密にするとともに、学部教育活動を援助し、もって大学教育の理念の達成に寄与する。」という後援会の会則の目的にあるとおり、先生方と保護者が一丸となり学生生活を安心しておくれるように支援していきたいと考えております。

同窓会の会員の皆様におかれましては、大学の発展と学生が自信をもって社会に羽ばたけるように応援いただければと思っています。今後ともご支援よろしく願いいたします。

プログラムだより

数学プログラム

プログラム長 鈴木 有裕

2023年度は、コロナウイルスも5類感染症に位置付けられ、学生たちが対面&マスク無しで活発に議論を行っている姿が多くみられるようになりました。卒業祝賀会も、コロナ発生前と同様の飲食有りの形態で行われ、学部学生40名、博士前期課程17名、博士後期課程2名が無事に卒業・修了しました。

8月には星明考教授が新潟大学学術出版奨励賞を受賞されました。また、11月には三浦毅教授と橋詰健太助教（2件）が新潟大学優秀論文表彰を受けました。これらは国際的に評価の高い学術図書及び論文の著者に対して与えられるもので、数学プログラムの研究力の高さを表すものとなっています。学生の研究も活発に行われており、12月には博士前期課程2年生の岩本峻汰さんが東北ORセミナー2023；若手研究交流会において学生優秀発表賞を受賞しました。また、2024年3月には博士前期課程2年生の遠藤凌輝さんが新潟大学学生表彰を受けました。

12月5日には数学プログラム講演会が行われ、小林大貴氏（新潟県立糸魚川白嶺高等学校）、石川智一氏（新潟県立新潟江南高等学校）から貴重なお話を伺うことができました。

また、劉雪峰准教授が8月末日をもって退職されました。劉先生は2014年10月に本学に着任され、博士前期・後期課程を含め、多くの学生を指導されました。

2024年度になり、関川浩永名誉教授が瑞宝中綬章を受章されました。関川先生は、微分幾何学分野において、リーマン多様体における幾何学的諸構造の研究、概エルミート多様体の幾何学の研究を行い、当該分野の発展に大きく貢献されました。この度のご受章の榮譽に輝かれたことを心よりお慶び申し上げます。

物理学プログラム

プログラム長 吉森 明

物理プログラムでは、2024年6月6日に第22回ケルビン祭が昨年度と引き続き対面で行われました。今年度は2019年以来5年ぶりにバーベキューによる交流会を行うことができました。多くの学生が参加し、教員との親睦を深めました。また、終了後も各研究室に分かれ、さらにいろいろな話が聞けて良かったと思います。その他、例年通りに、大学院説明会、学生表彰、研究グループの紹介、学生教員対話集会などが行われました。特に学生表彰では、「同窓会新人奨励賞」、「同窓会奨励賞」、および「中山賞」の3つの授賞式が行われました。「同窓会新人奨励賞」は物理プログラムに新たに配属された2年生の4名、「同窓会奨励賞」は4年生のうち3名の成績優秀者が表彰されるものです。「新人奨励賞」は昨年度2学期の受賞者が表彰されました。この2つの賞は理学部同窓会のご支援に

より実現しているもので、この場を借りて深く感謝を申し上げます。

学生教員対話集会では、講義のあり方やその他、学生が実際に困っていることなどについて、率直に学生と教員の間で議論を行いました。特に、プログラム配属や研究室配属の時期、講義の進み方の速度などについて、あらかじめ学生から寄せられたアンケートやその場で手を挙げてもらって希望を取りました。このような学生の声を取り入れ、物理プログラムではより良い教育研究環境の整備を継続していきたいと思っています。

昨年度は、物理プログラムを卒業した学部生は39名、博士前期課程を修了した大学院生が17名、後期課程で博士号を取得したものが5名いました。卒業生の内訳は進学が27名、企業が9名、公務員が1人、教員が2名と7割近い学生が大学院に進学しています。今後も社会で活躍する学生を育てられるようできるだけ努力している所存ですので、皆様方の温かいご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



化学プログラム

プログラム長 生駒 忠昭

2023年度の化学プログラムの活動から同窓会に報告したい最初の事項は、化学科（化学プログラムの前身）元教授の橋本哲夫先生の「瑞宝中綬章」受章です。橋本先生が化学科在職中に行われた「放射化学の応用を基軸にした研究と教育」の功績が主な受章理由です。春先の「橋本先生の受章」の知らせは、新年度をスタートしたばかりの後進にとって弾みとなりました。ほぼ同時期に、化学コース修士学生と三浦智明助教と岩本啓准教授が学内外の研究者と共同して行った研究の成果、ならびに三浦助教と学外研究者との共同研究の成果が権威ある学術雑誌に掲載され、本学からプレスリリースされました。大学院生ならびに若手教員の活躍は、化学プログラムの研究の活性化の鍵です。研究の活性化という観点では、化学プログラムが母体組織となっているユビキタスグリーンケミカルエネルギー連携教育研究（UGCE）センターがその一翼を担っています。これからの化学プログラムの研究を考えるために、UGCEセンター主催の講演会「溶液化学の新たな潮流」は韓助教が企画運営され、同センター

主催の「化学・医歯学分野横断セミナー」は中馬准教授と古川貢准教授が担当されました。これらの研究講演会は、化学プログラムが目指す研究を垣間見るような会でした。さらに、化学プログラム教員でつくる医療・化学コアステーション準備委員会が公開セミナー「光療法に関わる化学」を開催したところ、大学院生や若手研究者が集い、次世代研究の行方を議論し合うような会になりました。最後に、化学プログラムと化学コースにおける教育の国際化に向けた取り組みとして、台湾国立中山大学理学部化学科との交流事業を報告します。2023年12月18日に中山大学から呉理学部長と李化学科長を迎え、化学プログラム教員との交流会（写真参照）を開きました。そして2024年3月27日に大鳥学部長と小職が中山大学を訪問し、両校における教育の国際化や教員人事やダブルディグリー制度などの情報交換を行いました。学術交流の今後の発展が期待される事業でした。



（会報24号P.3 右側下から9行目の長谷川栄悦教授は長谷川英悦教授の誤りです。お詫びし、訂正いたします。）

生物学プログラム

プログラム長 西川 周一

生物学プログラムでは、2024年3月に学部卒業生30名と、大学院博士前期課程修了生12名を送り出しました。学部卒業生のうち18名は大学院（うち13名が大学院自然科学研究科に進学）に進学しました。大学院博士前期課程修了者のうち3名が博士後期課程に進学しました。ここ最近では前期課程進学者数の増加に加えて、数名が後期課程へ進学するという状況が続いています。朱鷺メッセでの卒業式後の「理学系 卒業・修了祝賀会」も飲食ありで開催され、コロナ禍以前の状況に戻りつつあります。

令和6年度の新入生のうち、生物学プログラムへの推薦入学者は4名、Frontier Study Project（FSP）の学生は2名でした。また、生物学プログラムに配属された3年生は、3年次編入生1名を含む合計19名です。コロナ前に行っていた新入生・編入生との懇談会も、今年度から復活しました。生物学プログラム現所属の学年すべてが懇談会未経験ということもあり、学部1年から4年まで希望者全員の参加を可能とするため、生協第1食堂で立食形式での開催となりました。9月末に行っていた、大学院生を含む生物学プログラム夏の懇談会も、今年度は開催できるのではないかと期待

しています。

生物学プログラムの教員構成も変わりつつあります。本年3月をもちまして、前野貢教授が定年退職されました。前野先生は、1994年（平成6年）5月に新潟大学理学部に助教授として着任され、2012年（平成24年）4月に教授に昇任されました。先生のご専門は脊椎動物の発生生物学で、29年の長きにわたって新潟大学において教育・研究に携われ、数多くの学部生・大学院生を指導されました。2014年（平成26年）から理学部副学部長、2017年（平成29年）からは理学部学部長として理学部の運営、特に2017年（平成29年）の理学部改組では多大な貢献をされました。3月1日に前野先生の最終講義と先生を囲む会が開催されました。最終講義には前野研究室の卒業生が多数駆けつけ、先生のご退職をお祝いしました。

4月には生物学プログラム主担当、自然環境科学プログラム副担当の助教として、神林千晶先生が着任されました。神林先生のご専門は、動物の系統分類と進化、動物間の遺伝子の水平伝播です。今後の活躍が期待されます。また、自然環境科学プログラムの墨谷暢子准教授、藤村衡至助教にも、副担当として生物学プログラムの教育を支えていただいています。新潟大学における教育・研究を発展させるべく、教員一同取り組んでいます。同窓会の皆様には、今後とも変わらぬご指導・ご支援を賜りますようお願い申し上げます。



地質科学プログラム

プログラム長 小西 博巳

今年の春、松岡篤先生と豊島剛志先生が退職されました。現在、地質科学Pには9名の教員がいますが、松岡篤先生は特任専門員として活動を続け、豊島剛志先生はフェローとして研究を続けています。両先生とも一部専門の授業をボランティアで続けてくださっています。

堆積地質学の分野で准教授を公募中で、来春に新しい教員が着任予定です。助教も公募中ですが、最終的な承認は不確かです。来春には栗田裕司先生も退職し、教員数は10名または9名になります。教員の減少が続いています。

今年の春、16名の4年生が卒業し、9名が新潟大学の博士前期課程へ進学、土木建設関係に2名、一般企業に1名が就職、専門学校に1名進学しました。未定が3名。博士前期課程では13名が修了し、うち1名が北海道大学へ進学、土木建設関係に5名、資源関係に3名、博物館に1名、一般企業に2名、教員として1

名が就職しました。博士後期課程の修了者1名は研究を継続しています。

今年度の博士前期課程入学者は8名で、博士前期課程には16名、博士後期課程には7名の大学院生が在学中です。インドと中国からも大学院生が学んでおり、国際的な環境での学びを提供しています。

2022年に14名、2023年に12名が地質科学プログラムに配属され、今年度は直近の希望調査では11名が地質科学プログラムを希望しています。改組前の定員25名から比べると、学生数は減っていますが、その分、密度のある教育を継続していきたいと考えています。

コロナ禍の影響が和らぎ、授業は対面で行われています。7月には「地質の日 サイエンスフェスティバル」を行いました。10月の大学祭では、「秘粹」が復活するかもしれません。7月の理学部コロキウムでは、株式会社日さくの佐藤壽則さんに「建設事業は「地盤と地下水」からー地質調査業の役割ー」と題して講演をしていただきました。今後も地質科学プログラムの魅力を継承しつつ、教育を発展させていくために、皆様からの温かいご支援を引き続きお願い申し上げます。



自然環境科学プログラム

プログラム長 副島 浩一

本年3月に24名の卒業生を送り出しました。卒業生の進路先は、進学10名、公務員4名、教員1名、企業等9名となっています。卒業した学生数が例年と比べて少ないことも気になりますが、進学率が下がっていることを心配しています。また、昨年度のプログラム選択時に、24名の学生さんが本プログラムの配属になりました。こちらも以前と比べると人数が減っており、学生や社会のニーズに合わせた積極的な組織改革の時期に来ていると感じさせます。本年度4月から新たに、気象学がご専門の高橋直也先生と生物学がご専門の神林千晶先生が本プログラムの副担当として教育カリキュラムにご協力いただくことになりました。ご両名とも主担当はそれぞれ、フィールドPおよび生物Pと他プログラムではありますが、本プログラムの教育の一翼を担っていただくことになります。優秀な若手教員の加入によりゆっくりとではありますが若返りが進みつつあり、今後関連プログラムを含め、教育・研究が活性化されることを大いに期待しています。

昨年から徐々にコロナ禍の鬱屈とした生活から解放

され、明るい気持ちで迎えた2024年の元日でしたが、能登半島地震により出鼻を挫かれた思いです。砂丘の上にある大学は液状化の影響からは免れましたが、それでも構内およびその周辺は少なからず被害を受けました。例えば、我々のグループの実験室では、重心の高い真空チェンバーは倒れ、付帯設備が壊れる目にありました。幸い元日であったため無人で、人的な被害がなかったこと、我々以外の研究室からは大きな被害を聞かなかったことが救いです。

昨年10月に第23回創環会が開催され、その際に「先生方を囲む会」としてコロナ禍で実現しなかった増田先生の叙勲お祝い、久保田先生、浮田先生の退職お祝いを、形が違えど実施できたことは、お三方が在職されていた時にお世話になった1人として大変うれしく思いました。また、食事をしながらたくさんの同窓生とお話でき、個人的にとっても楽しかったです。この場をお借りして、お忙しい中参加していただいた同窓生の皆様にお礼を申し上げます。また、企画の立ち上げ段階からご協力をいただいた自然環境科学科支部長の尾原さんや幹事の畑澤さんに感謝申し上げます。今年度は開学75周年の記念年でありますから、また皆で集まったらいいですね。同窓会の皆様におかれましては、これまでのご高配にお礼を申し上げますと共に温かなご支援を今後とも賜りますよう、よろしく願いいたします。



フィールド科学人材育成プログラム

プログラム長 本田 明治

2024年3月に13名（農学部と合わせると22名）の卒業生を第4期生として送り出しました。接続する大学院フィールド科学コースからは、博士前期課程修了者18名、初めての博士後期課程修了者1名を送り出しています。4月からは4年生17名（農学部と合わせると29名）が各研究室に配属されました。また、博士前期課程には18名、博士後期課程には3名が進学しています。

この4月以降、教員にも動きがありました。4月より高橋直也助教が着任されました。高橋先生の専門は、海洋物理学及び大気海洋相互作用です。海面水温の異常な高温状態が時には数ヶ月以上も続く「海洋熱波」など、海の極端イベントの発現メカニズムやその予測可能性などを大規模データ解析や数値実験によって取り組んでいます。また、6月には石崎智美助教、野口里奈助教が揃って准教授に昇任されました。2017

年の開設時は4名だった理学部フィールド科学人材育成プログラムの主担当教員は、教授2、准教授3、助教1の合わせて6名体制となり、今後当プログラムの教育・研究がますます充実・展開していくことが期待されます。

この1年間のプログラムの活動を振り返ると、授業や研究活動及び卒論・修論発表会、オープンキャンパスや学生の率直な意見を聴く対話集会など各種行事がコロナの収束に伴って対面型に戻りました。在学生に

フィールド科学研究の魅力を伝えるフィールドナビでも、対面型に戻ったことによって「講義を受けるだけでは分からない、教員と研究室学生の雰囲気を知れて良かった」と学生に好評でした。野外での調査・研究が特に多い当プログラムの教員や学生にとっては、制限のない活動が可能になったことはこの1年での大きな展開です。これに加え、コロナ下で培われたオンライン型の調査・活動も組み合わせることで、今後更なる多角的な教育・研究の展開が期待されます。

コラム 佐渡自然共生科学センター海洋領域/臨海実験所

佐渡自然共生科学センター海洋領域長 安東 宏徳

臨海実験所は、1954年の発足以来65年にわたり理学部附属施設として、日本海の特徴を背景に佐渡沿岸域に生息する海洋生物の多様性とその成り立ちに関する教育・研究を行ってきました。2019年4月に全学共同教育研究施設として佐渡自然共生科学センターが発足し、その海洋領域/臨海実験所に改組されました。改組後は、森林領域（演習林）、里山領域（朱鷺・自然再生学研究施設）と協働して、森里海生態系の構造と機能を総合的に理解する教育・研究を展開しています。2021年6月には研究棟と宿泊棟が全面的に改修され、2022年10月には新船「アイビスⅡ」が進水しました。教育活動として、理学部の生物学・地質科学・自然環境科学の各プログラム、理農学部横断型のフィールド科学人材育成プログラム、大学院自然科学研究科生命・食料科学専攻の学生を対象にして、基礎生物学、海洋生物学およびフィールド科学に関する講義や実習を担当しています。また、2013年以降、文部科学省教育関係共同利用拠点に認定されて、国内外の大学や初等中等教育機関との連携を基に、学外の学生を受入れて年間約30件の共同利用実習を実施しています。特に、国際連携を積極的に推進し、海外の大学から学生と教員を受入れて国際臨海実習「International Marine Biology Course」を毎年実施しており、その参加校はアジア圏を中心に世界各国の15校に及びます。

今後も、コロナ禍で蓄積したオンラインによる実習のノウハウとオンデマンド動画を活用し、より多彩でグローバルなフィールド教育プログラムを国内外の大学に提供して、国際海洋生物学教育共同利用拠点として活動していきます。研究活動として、海洋生物の生理、生態、発生、分類に関する研究を進めてきました。佐渡島沿岸域は多様な海岸環境を持ち豊かな生物相に恵まれています。未記載種や太平洋沿岸では稀にしか見られない希少種も多くいます。これまでに佐渡島固有の新種としてサドナデシコナマコ (*Scoliorhapis dianthus*) とキングギドラシリス (*Ramisyllis kingghidorahi*) を発表しました。また、魚類の生殖生理に関する研究としてクサフグの月周産卵リズムに関する研究や森里海を結びつける川を回遊する小型通し回遊魚についての研究を行っています。



令和7年度は総会開催年度です

来年度は3年に一回の総会開催年度です。例年の事業報告・計画、収支決算・予算のほか、会長の選出、会則の改訂が議題となる予定です。会場の関係で日時は未定ですが、6月中旬過ぎの土曜日または日曜日の午後に「駅南キャンパスときめいと」で開

催予定です。総会終了後、理学部との懇談会や懇親会も予定しています。詳しくは12月末頃にホームページに掲載しますのでご覧ください。多くの会員の出席をお待ちしております。

支部だより

数学科

支部長 轡田 勝祐

まず、恩師が叙勲の栄に浴されたことをお伝え申し上げます。令和6年春の叙勲において、関川浩永先生（理学部名誉教授、理学部元教授、数学科14回卒）が、瑞宝中授章を叙勲されました。同窓である関川先生に数学科支部一同でお慶び申し上げます。先生のご業績に敬意を表します。

さて、数学科支部の近況をお知らせします。令和6年度支部役員会を4月21日にオンラインで13名の出席で開催し、前年度報告・決算、本年度計画・予算などを協議しました。理学部数学プログラムへの補助として、令和5年度は、国際交流事業と数学プログラム講演会の講師への交通費等に補助いたしました。今年度についても、同様の支援を行う予定です。また、新潟大学創立75周年記念事業として数学プログラムと共催で『ホームカミングデー』を10月18日（金）に計画し、同窓のお二人の方（日本精機株式会社代表取締役社長、富山大学理学部教授）の講演を予定しています。ぜひ、この機会に久しぶりに新潟大学へいらしてください。

結びに、皆様のご寄付のお願いとして『創立75周年記念募金』と『理学部次世代サイエンス人材育成拠点整備応援基金』が大学と理学部のホームページにその趣旨や寄付の仕方が掲載されています。その内容をご理解いただいた上でご賛同いただきたいと存じます。

物理学科

支部長 麿沢 祐一

今年も、6月6日のケルビン祭に出席してまいりました。

開会式の後、吉森 明 物理プログラム長のごあいさつの後、物理支部から4年生の成績優秀者の学生3人に物理学科同窓会賞として、それぞれ1万円の図書カードを贈呈し、他に新人賞として5千円の図書券を4人に贈呈しました。その後ご挨拶させていただきました。

物理支部は、例年通りの活動をしてまいりましたが、これからも理学部物理プログラムの学生を支援する活動を考えてまいります。

化学科

支部長 畠野 弘通

同窓の皆様、如何お過ごしでしょうか。第11波のコロナや新たな感染症が広まっています。生成系AIとシンギュラリティの可能性をはじめ、将来予測が困難なVUCA（ブーカ）の時代でもあります。健康・体

力・気力が、一層、大切と考えている昨今です。

支部と学部の役員会・代議員会、学部総会、学部との懇談会などに、役員の皆様と参加をしてみいました。それらの会議の中で、大島学部長様、後藤准教授様から化学プログラムへの支援のご要望をお聴きし、協議の結果、以下の支援をすることといたしました。

1つは、創立75周年を記念したホームカミングデー（卒業生と在校生との交流会）事業への補助。

2つは、化学プログラム4年生の成績優秀者への奨励金と化学プログラムに配属する2年生の歓迎懇談会への補助。

今年度の支援は約10万円。原資は、学部からの交付金5万円と支部費から約5万円です。学生やOBの活動が、より活性化することを願っています。

新規事業引き続き募っています。学部事務局を通して、お尋ねいただければ幸いです。

今年も支部活動への支援、ご協力をお願い申し上げます。

生物学科

支部長 荒木 勉

同窓生の皆さん、いかがお過ごしでしょうか。

昨年度も、生物学科支部では、特段の活動らしきものはありませんでした。いつもお詫びから便りが始まり申し訳ありません。

昨年の7月に、新潟県内に在住の生物学科同窓生のうち、50～65歳程度までの方々に、いかに代替わりを行うかが喫緊の課題であると、昨年度、この会報でもお願いし、代議員等に応募していただきたいと、手紙でも訴えましたが変化は見られませんでした。来年度は3年に一度の学科同窓会総会を開催する年度です。6月後半の土曜日または日曜日に、理学部同窓会総会が開催されますので、その日の午前中に予定しております。詳しい日程は、後で理学部同窓会ホームページでお知らせいたしますので何卒ご参加のほどよろしくお願いいたします。

地質科学科

支部長 豊島 剛志

「地質の日サイエンスフェスティバル」のイベントが、2023年7月17日に新潟大学理学部内にて久々に開催されました。市民の方々にも多数ご参加いただき、盛り上がったイベントとなりました。さらに、支部が支援し、2023年10月21日～10月22日に新潟大学Weekの「地質まつり」と「地質科学科の未来に向けて：卒業生と在校生の集い」が実施されました。「地質まつり」の参加者は1,420名、「集い」の参加者は42名でし

た。これらイベントを通じ、卒業生・在校生・教員だけでなく市民の方々との交流が対面で深められました。また、2024年新春に予定していた支部新年会は令和6年度能登半島地震が起こったため中止となりました。長らく新年会が中止となっているため、2024年度中に支部の懇親を深める機会を設けたいと考えています。

2024年度の集中講義「土土地質学」は、昨年度に引き続き、昭和59年度卒の池田伸俊氏(株式会社 興和)が担当し、対面授業を行う予定であるとのこと。

「野外地質調査・野外調査に基づく研究なら新潟大学理学部の地鉱・地質」と言われる伝統が続くよう、当支部はこれからも教室への協力を続けていきます。



自然環境科学科

支部長 尾原 祥弘

いつも同窓会の活動にご理解とご協力をいただきありがとうございます。今年は、正月早々に能登半島地震が発生し、大変な年明けとなりました。新潟県内でも震度5強、5弱を記録し、津波も観測されました。

犠牲になられた方に深く追悼の意を表するとともに、被災された皆さまに心よりお見舞い申し上げます。

昨年度は、11月4日(土)に総会、先生方を囲む会、懇親会を行いました。先生方を囲む会では、コロナ禍で実施できなかった退官された先生方の最終講義と瑞宝中綬章を授章された増田先生のお祝いを行いました。同窓生38名、現任教員9名、退官された教員4名が参加して下さり大変盛り上がりしました。会の様子は、ホームページに掲載していますのでご覧ください。参加して下さった皆様ありがとうございました。今年も懇親会を行う予定にしていますので皆様のご参加をお待ちしています。

今年からようやく同窓会の業務についてデジタル化し、ハガキや紙を使わない方向に移行を始めました。公式のメールアドレスやInstagramによる発信にも挑戦します。ホームページもリニューアルしました。フォローやリアクションをしていただけると嬉しいです。同窓会の仲間とのやり取りが日常生活のちょっとしたアクセントとなれば幸いです。

首都圏同窓会

と私

理学部首都圏同窓会の現況

首都圏支部長 安 藤 勝 利

首都圏同窓会では、コロナ禍の間、密を避け総会開催を自粛しておりましたが、昨年の秋(10月28日)にリニューアルした東京新潟県人会館にて再開しました。今回初めてWebでの配信を試みた結果、56名もの多数の参加があり役員一同感謝しております。

恒例のサイエンスセミナーでは、大鳥理学部長による理学部の現状と課題について、豊島理学部教授による南極観測隊に参加された時の様子や南極の地質、地震の痕跡について、地質学科卒の宮下由香里さんからは地層に残された地震の痕跡から活断層による地震の予測について講演を頂きました。その後コロナ禍開けということもあり、お酒抜きで軽食の提供のみとして短時間ではありますが懇談会を催し

ました。

今年は、9月21日に東京新潟県人会館にて大鳥理学部長、大井理学部助教、日本精機(株)の佐藤浩一社長をお招きし講演を頂くと共に、総会懇親会の準備を進めております。

また、今春には首都圏同窓会の紹介リーフレットを再編集作製し、理学部卒業生及び首都圏同窓会会員に配布いたしました。

皆様におかれましては、理学部首都圏同窓会に集い新しい知見に触れ、総会後の懇親会等で旧交を温めるよう奮ってご参加下さいますことお願い申し上げます。

今後とも理学部首都圏同窓会の活動に対し、ご支援ご協力をお願いいたします。

11月下旬に名簿作成用調査はがきが届きます

同窓会会員名簿は5年ごとに作成・発行しております。名簿発行の業務は、この会報発送もお願いしている㈱サルトに委託し、令和7年8月の発行を目指して作業を進めております。11月の下旬には名簿

作成のため、会員宛に調査ハガキが届けられる予定となっています。

若手卒業生から（実社会に出て）

数学プログラム

2023年卒 大坂 綾花

現在、神奈川県立高校の数学教諭として働いています。授業・学校行事・部活動など様々な活動に全力で取り組み、成長する生徒の姿を見守ることに喜びを感じています。

ところで、私の好きな言葉に「継続は力なり」という言葉があります。これは、何事も続けて努力すれば、それが力となり成果を生むという意味です。大学時代、数学で理解できなかったところを、地道に学習を積み重ねることによって、理解することができるようになったという達成感は今でも忘れません。

今後は、一生懸命な生徒の支えとなれるよう粘り強く授業力や指導力の向上に努めていきたいと思っています。



かし、新工場立ち上げの業務に携わっており、大学で培った「解のない問題に対するアプローチ」で仕事に取り組んでいます。これからも知識や技術を習得し、学生時代に培った視点と社会人で身に着けるエンジニアの視点の2つを武器に世の中に貢献していきたいです。

生物学プログラム

2023年卒 堀内 理聖



生物学プログラムを修了し、IT企業にてSEとして勤務しております。大学では、先生方や友人との議論や多様な講義を通して、生物学の面白さを体感する日々を過ごしました。卒業時には専攻と異なる業種に就職することに不安がありました。

大学で身につけた「仮説を立て粘り強く調査し、検証する習慣」は現業務での課題解決に活かしています。業務では未熟な自分に悔しい思いをすることもあります。熱意を持ってご指導くださる先輩方、寄り添ってくれる家族や友人のおかげで、社会人1年目を駆け抜けることができました。選択した道を正解にできるよう、また、支えていただいた方にご恩をお返しできるよう、これからも精進してまいります。

物理学プログラム

2023年卒 鈴木 秀人



私は新潟大学理学部を卒業し、大学院自然科学研究科に進学して液体の支配方程式について研究しています。まさか大学院にまで進んで物理学を研究しているなんて、小さい頃の自分には想像もつかなかったことだと思います。現在の研究は非常に専門的で、大学時代

に必死に学んだ内容が基礎的だったのかと驚くばかりです。県外の研究会や学会へ参加したり、英語で難しい内容の論文を読んだり、不慣れなことの連続で不安に苛まれることもあります。多くの優しい研究室の仲間と懇切丁寧な先生のおかげで、何とか大きな蹉跌もなく過ごせています。この恵まれた環境に感謝しながら、これからも研究活動を頑張りたいと思います。

地質科学プログラム

2022年卒 長谷川 舞帆

私は2024年に自然科学研究科を修了しました。幼い頃から研究職に憧れを抱いていたという思いから、セメントメーカーの研究開発部に勤務しています。約1ヶ月の研修期間を経て、現在は各工場で生じた異常製品の分析や新技術の運用化試験に携わっています。



初めは不安でしたが、自分が作成した資料や収集したデータが他の部門に共有されたり会議で使用されたりしているのを見ると、達成感が湧くとともに実社会に出たのだなと実感します。

私は大学院生の頃、体調を崩してしまい研究室に行けない期間がありました。ですが、指導教員をはじめ多くの方々からのサポートもあり無事修了できました。「本当に辛い時は頼る」を胸に留め、これからの社会生活を謳歌したいです。

化学科

2021年卒 土屋 秀太

2021年に理学部化学科を卒業し、2023年に自然科学研究科化学コースを修了しました。現在は民間企業に勤め2年目となります。社会人から新しい分野も挑戦したいと思い、半導体製造メーカーへ飛び込みました。入社後から今日に至るまで、日々勉強の毎日です。入社初年度は研修や海外出張経験を通じて製品や工程に対する知識を身に着けました。今年度はその知識を生



自然環境科学科

2022年卒 清水 幸大



私は新潟大学大学院を卒業後、水インフラのコンサルタント会社に就職し、現在社会人になり約3カ月が経ちました。私は大学院時代、海洋化学を専攻していましたが、就職した会社での仕事は全く異分野のもので今まで学んできた学問はほとんど活かすことができていません。しかし、私はこうなることは理解したうえで会社を選びました。私は今までの人生、特に大学院では「学び方」を学んだと考えているからです。実際に現在は仕事に関する知識を学びながら働いています。新しい分野を1から学んでいくことは大変だと感じるのと同時におもしろさを感じています。数年後自分の専門分野を聞かれた際には、自信をもって今の仕事の話ができる姿を目指しております。

フィールド科学人材育成プログラム

2023年卒 岩田 梓



私は理学部フィールド科学人材育成プログラムを卒業し、浜松市の中学校教員として働いています。中学生の頃からの夢であった理科教員になり、日々の教材研究を通してより一層科学の面白さを感じると共に、どうしたら生徒がワクワクした気持ちをもって科学を探究できるか試行錯誤しています。

地元とも新潟市とも異なる文化がある中で教育現場に立つと、分からないことがたくさんで、1年目の昨年は先輩方に支えてもらいながら慣れることで精一杯でした。2年目の現在は、担任業務、教科指導だけでなく、部活顧問、生徒会指導、修学旅行担当などの分掌を行っています。たくさんの先生方と一緒に働く中で、任せてもらえる仕事が増えていくことに楽しさを感じています。未来の担い手を育成する教育現場で働くことに、責任と誇りをもって日々努力を続けていきたいです。

理学部同窓会特別会費

納入者御芳名(敬称略)

令和6年6月末現在

● 数学科支部

竹内 正文	響田 勝祐	伊藤 道一	上野 卓政
田口 継治	吉成 毅	柄澤 涼司	伊東 孝芳
丸山 善久	畑中 正雄	岩田 隆子	井村 悦子
鈴木紀美子	苅部 富雄	玉田 鉄平	渡邊 譲
原 幸仁	畠山 トシ	永井 健樹	樋浦 卓嘉
細野 晃	佐藤 浩一	鈴木 隆敬	田中 環
日比登史男	福田 世喜	山本 融一	野尻 信明
寺尾 芳樹	二瓶 静男	佐々木 潔朗	大竹 昌弘
石井 和也	堀 行	野村 宗平	永井 邦昌
伊豆野泰弘	青木 孝史	高橋 正	若林 広明
角井 伸一	千葉 宏	伊藤 真知子	清水美和子
繰 詳子	櫻井 玲子	金子 正義	永原 秀十志
牛丸 智博	佐藤 英男	高橋 峰洋	
小林祥一郎	後藤 守	齋藤 裕	
山口 真理	小畑 尚之	小畑 裕	
宮崎 勲	中井 良	鈴木 智大	

● 物理学科支部

水谷 先宏	白川 保憲	野坂 孝雄	加藤 宏規
五十嵐 敬	霜鳥 達雄	川田 尚	風間 陸男
堀 秀信	青柳 秀一	須賀 正明	比嘉 駿
森山 久夫	廣田 星一	矢野伊佐夫	山田 徳昭
坂部 充孝	佐藤 三男	山岸 靖宏	黒沢 昌基
赤塚 節	高見沢 一男	遠藤 浩	小倉 潤
熊谷 周三	岩澤 健二	山口 喜啓	伊藤 静香
畑野 清司	福本 彰	鈴木 陽典	田中みちる
小林 一男	渋谷 孝雄	新部 正人	武田 政義
鈴木 守夫	牧口 一男	高橋 透	田辺 勝
本間 正宜	碓間 俊昌	榊原 靖夫	中嶋 悟
長谷川 直	水谷 洋二	後 明均	小幡 卓司
橋本 俊彦	鈴木 俊男	山崎美穂子	久保嶋梨絵
寺前 直子	前田 義憲	金谷 均	
関川 光博	石川 二男	石井 智	
渡辺 俊英	田中 隆明	北見 秀樹	
		菅野 義博	

● 自然環境科学科支部

中川 実紀 櫻井由起子 小田鼓乃佳

● フィールド科学人材育成支部

飯澤 広晃

● 化学科支部

玉木 恵子	青木 英二	百瀬 泰紀	斎藤 博之	細川 伸幸
梅澤 貞雄	吉川 義雄	東田 良和	鈴木 華奈子	佐藤 高次
田巻 繁	殿内 重政	小松 繁美	佐藤 友美	渡辺 聖美
長尾 典	間 和彦	村山 茂子	田澤 滋樹	高橋 倫子
佐合ヒロ	土屋 知子	尾崎 恭子	稲野 浩一	富樫 幸江
新一	恒雄	杉山 義昭	石山 友英	井澤 和也
ソネ 澄江	俊雄	青柳 義昭	小嶋 健	井上 達也
塩畑 洋子	星野 弘通	三ツ寄 敏雄	板垣 久成	新関 鈴木
松澤 茂司	島野 弘	吉井 文子	佐藤 勝美	大塚 凱
佐藤 進	藤田 幹雄	滝沢 貞親	吉田 啓子	
半田 宏	福島 幹	森田 朗	小野 綾子	
赤沢 豊	山口 衛	飯田 英典	井上 健一郎	
小林 宜哉	本間 悟	岩崎 匡臣	近藤 幹	
岩野 義夫	小川 茂樹	宮本 良弘		

● 生物学科支部

酒井 芳男	長谷川 英男	信田 庸二	猪熊 正則	榎本喜美子
小関 恒雄	久和 彰江	井村 宏之	松本 真実	佐々木 哲
阿部ヒカル	箕輪 正和	高須 俊克	櫻井 幸枝	門脇 康之
伊東 善昭	白田 誠	高山 幸弘	山崎 浩太郎	遊佐 和之
内田 善昭	藤井 保	笹川 通博	柴野 卓志	屋井 潮美
小林 道頼	林 正栄	久保 隆之	藤原 信一	宮下 哲典
清水 榮一	藤井 博	佐藤 克美	保要 有里	桐山真由子
児島 英介	藤本 鑑乗	北川 智士	木村 太郎	
長谷川 博	吉田 一弥	田丸 幸一	鶴巻 達大	
星野嘉恵子	富永 弘	伊藤 達朗	頓所 裕史	

● 地質科学科支部

倉又 孝夫	二瓶 文雄	清水 功	田中 力	長江 晋
山岸 俊男	岡田 正明	武田 茂典	金子 良仁	竹内 均
石橋 輝樹	笹川 一郎	五十嵐 充	柿崎 聡	田利信二朗
加藤 靖夫	伊与田成子	北脇 裕士	渡部 直喜	小川 乃絵
赤松 陽	薦田 靖志	滝本 俊明	佐久間 幹	八木 郁恵
山野井 徹	中水 勝	宮本 弘彦	柄澤 幸一	山崎 晴香
吉田 慈	稲垣 英昭	宮本 弘彦	岩本 孝司	長谷川千博
松波 武雄	稲垣 正純	栃原 真与子	岩本 武敏	藤井健太郎
小村 寿夫	飯野 芳則	佐藤 陽一	小島 玄生	
浜崎 邦正				

● 旧職員

中田 石塚 鈴木 俊雄 渡部 剛 吉原 久夫
のり 紀夫 徳江 郁雄 長谷川英悦

表 1 2023年度 理学部同窓会決算

一般会計					
収入の部	費 目	予算額(A)	決算額(B)	比較(B-A)	説 明
	終 身 会 費 ・ 寄 付 金	5,000,000	4,700,000	-300,000	
	終 身 会 費	4,000,000	3,580,000	-420,000	新入生 179名×20,000円
	特別会費・寄付金等	1,000,000	1,120,000	120,000	ゆうちょダイレクトは250名、らくうるカートは44名(含大学基金への寄附20,000円)
	他 会 計 繰 入 金		0	0	
	雑 収 入	80,000	155,352	75,352	預貯金利息、全学同窓会資料会員配送費清算115,912、支部補助費返金39,200
	前 年 度 繰 越 金	2,393,622	2,393,622	0	現金、第四北越銀行普通預金、ゆうちょ通常貯金、ゆうちょ振替貯金
収 入 合 計		7,473,622	7,248,974	-224,648	
支出の部	費 目	予算額(A)	決算額(B)	比較(B-A)	説 明
	会 議 費	175,000	148,304	-26,696	諸会議交通費、会場費
	広 報 費	1,910,000	2,119,891	209,891	
	「会報」発行費用	400,000	401,093	1,093	理学部同窓会誌「会報24号」(7,500部)印刷代
	「理学部は今」発行費用	500,000	520,740	20,740	理学部機関誌「理学部は今」(7,500部)費用分担
	会員宛資料配送費	1,000,000	1,191,417	191,417	7,025名分 その他資料印刷費・配送費
	そ の 他	10,000	6,641	-3,359	H P 運営費
	事 業 費	1,265,000	681,830	-583,170	
	理学部支援事業費	720,000	300,000	-420,000	グローバル人材育成推進事業支援無し・卒業祝賀会
	支部事業補助費	450,000	300,000	-150,000	3支部(数学、地質科学、自然環境科学)に助成
	名簿編集費	20,000	0	-20,000	
	その他事業費	75,000	81,830	6,830	特別講演会ポスター・講師謝礼・消耗品等事務費
	負 担 金 等	500,000	490,045	-9,955	全学同窓会賦課金(30,000+500万×9.1954%)
	支 部 交 付 金	460,000	460,000	0	50,000円×6支部+首都圏支部160,000円=460,000円
	事 務 諸 経 費	123,000	100,702	-22,298	光熱水費、郵送料、払込手数料、印刷費、消耗品、等
	事 務 局 費	500,000	453,400	-46,600	事務局人件費
	人 件 費	0	0	0	
	予 備 費	1,540,622	20,000	-1,520,622	予備費・調整費(特別会費に振り込まれた大学基金への寄附の支出)
	他会計(積立金特別会計)繰出金	1,000,000	1,000,000	0	
支 出 合 計		7,473,622	5,474,172	-1,999,450	
積立金特別会計					
特別会計	費 目	収 入	支 出	残 高	説 明
	2022年度までの積立額			19,000,548	定期預金(利息は一部を除き一般会計預金口座に振替)
	繰 入 金 ・ 繰 出 金	1,000,000	0	20,000,548	
	定期預金元金振替分の利息	78		20,000,626	その他の利息は一般会計預金に振り替え

表 2 2024年度 理学部同窓会予算

一般会計					
収入の部	費 目	前年度予算額(A)	今年度予算額(B)	比較(B-A)	説 明
	終 身 会 費 ・ 寄 付 金	5,000,000	5,000,000	0	
	終 身 会 費	4,000,000	4,000,000	0	新入生入学定員200名×20,000円
	特別会費・寄付金等	1,000,000	1,000,000	0	会員等からの特別会費及び寄附金等(目標額)
	他 会 計 繰 入 金	0	0	0	
	雑 収 入	80,000	80,000	0	利子、全学同窓会発送資料同封手数料交付金、支部補助精算金等
	繰 越 金	2,393,622	1,774,802	-618,820	現金、第四北越銀行普通預金、ゆうちょ通常貯金、ゆうちょ振替貯金
合 計		7,473,622	6,854,802	-618,820	
支出の部	費 目	前年度予算額(A)	今年度予算額(B)	比較(B-A)	説 明
	会 議 費	175,000	175,000	0	諸会議交通費、会場費等
	広 報 費	1,910,000	2,160,000	250,000	
	「会報」発行費用	400,000	400,000	0	理学部同窓会誌「会報25号」印刷代 前年度決算額を参考
	「理学部は今」発行費用	500,000	550,000	50,000	理学部機関誌「理学部は今」費用 前年度実績を参考
	会員宛資料配送費	1,000,000	1,200,000	200,000	会員宛会報などの郵送料・運賃等 運賃改定・会員増を勘案
	そ の 他	10,000	10,000	0	H P 運営費等(前年実績を参考)
	事 業 費	1,265,000	1,280,000	15,000	
	理学部支援事業費	720,000	800,000	80,000	国際会議(ICNS2024)補助費、卒業祝賀会補助費等
	支部事業補助費	450,000	450,000	0	昨年度は3支部に補助
	名簿編集費	20,000	10,000	-10,000	(名簿作成業務は外部に委託)
	その他事業費	75,000	20,000	-55,000	
	負 担 金 等	500,000	500,000	0	全学同窓会賦課金 500万円×学部定員数で按分+定額30,000円
	支 部 交 付 金	460,000	460,000	0	50,000×6支部+首都圏支部160,000
	事 務 諸 経 費	123,000	123,000	0	光熱水費、事務通信費、払込手数料・料金、印刷代、消耗品、パソコンOS
	事 務 局 費	500,000	500,000	0	事務局人件費 前年度決算を参考
	人 件 費	0	0	0	後援会パートなし
	他会計(積立金特別会計)繰出金	1,000,000	1,000,000	0	2024年度積立金(昨年度積立実績は1,000,000)
	予 備 費	1,540,622	656,802	-883,820	
合 計		7,473,622	6,854,802	-618,820	
積立金特別会計					
特別会計	費 目	収 入	支 出	残 高	説 明
	2022年度までの積立額			20,006,626	定期預金(利息は一部を除き一般会計預金口座に振替)
	2023年度積立額	1,000,000		21,006,626	
	2023年度利 息	78		21,006,704	定期預金利息の内、定期元金に振替えられる分 前年並みを計上

事務局より

1. 2024年度理学部同窓会

「役員会・代議員会合同会議」の開催

・開催日：6月22日(土)

会 場：駅南キャンパスときめいと

<議 事>

(1) 2023年度事業報告・決算報告

・事業報告(下記2)・決算報告(前ページ別表1)及び会計監査報告が行われ、原案通り承認された。

(2) 2024年度事業計画・予算案

・前ページ別表2の通り提案され、原案通り承認された。

(3) その他

・来年度の総会に次期会長として畠野弘道化学科支部長を推薦することおよび、会則の改訂(改訂案はホームページに掲載)を提案することが承認された。

(※)会議後、「理学部との懇談会」が行われ、有意義な意見交換が行われた。(下記写真)



2. 2023年度事業報告

(1) 広報活動

・正会員に会報24号の送付。「雪華」は昨年送付できなかった21号と22号の両方を送付した。

(2) 理学部からの要請にもとづく各種事業

・卒業祝賀会が久しぶりに行われ、その経費を支出した。

・グローバル人材育成プログラムはコロナ禍以来実施されなかった。

・A1棟改修基金の募金依頼趣意書を会報に同封し会員に送付した。

(3) 全学同窓会との連携

・賦課金・分担金を応分負担し、財政的に貢献した。

・各種会議に出席し、運営に貢献した。

(4) 会費及び寄付金について

・後援会と連携し、2023年度新入生より会費を徴収した。

・昨年度から財政力強化のため「整備・振興寄付金」を「特別会費」と名称変更し、振込方法を複数化した。

・例年どおり多くの方からご寄付を頂いた。

(5) 特別講演会について

・期日：2023年10月21日(土)

・会場：理学部B棟303講義室

・講師：関東学院大学理工学部 教授

山田 泰一(物理学科第21回生)

・演題：原子核物理の世界に魅せられて

2024年度 理学部同窓会役員名簿

役 職	支 部	氏 名	役 職	支 部	氏 名
会 長	物 理 学 科	麿 祐一		化 学 科	本間 悟
副会長	数 学 科	轡田 勝祐			田辺 薫
	物 理 学 科	麿 祐一			清水 榮一
	化 学 科	畠野 弘通		生 物 学 科	長谷川 博
	生 物 学 科	荒木 勉			堀 昌明
	地質科学科	豊島 剛志			関谷 一義
	自然環境科学科	尾原 祥弘		地質科学科	佐藤 壽則
	首 都 圏	安藤 勝利			渡部 直喜
幹事長	地質科学科	渡部 直喜			畑澤 尚宏
幹 事		武石 文雄		自然環境科学科	加藤 直之
	数 学 科	轡田 勝祐			柿原 芳章
		田中 環			安藤 勝利
		鈴木 重行		首 都 圏	飛鳥 滋
	物 理 学 科	坂井 章			信田 庸二
		笹川 民雄		数 学 科	若杉 和哉
	化 学 科	三ッ寄敏雄		自然環境科学科	志賀 隆

転退職された先生方(令和6年3月)

退職 生物プログラム

前野 貢(教授)

在職期間：平成6年5月～令和6年3月

専門分野：発生生物学

退職 地質科学プログラム

豊島 剛志(教授)

在職期間：平成2年4月～令和6年3月

専門分野：構造地質学

退職 地質科学プログラム

松岡 篤(教授)

在職期間：昭和62年6月～令和6年3月

専門分野：地質学及び古海洋学

◆◆ 編集後記 ◆◆

理学部同窓会紙第25号をお届けいたします。今回も、多くの方々から原稿依頼を快く受けていただき、無事発刊に至りました。紙面の体裁は、昨年度と大きく変えることはせず、写真を多めにしてお見やすくしました。「同窓会報25号」と「理学部は今」とを併せてお読みいただき、理学部の現状と実情に想いをいたしてください。

新潟大学理学部同窓会(事務局)

住 所 〒950-2181
新潟市西区五十嵐2の町8050
新潟大学理学部内
T E L 025-262-6261
E-mail ridoso@ad.sc.niigata-u.ac.jp
U R L http://www.ridoso.jp/